コツコツ学ぼう！ほ ね で ら 今 昔 物 語

～ 田染荘と骨寺村の編 ～

第3号

飯沼賢司先生

去る平成22年12月5日、一関文化センター中ホールにて、骨寺荘園室主催の講演会「村落荘園遺跡と文化的景観―田染荘と骨寺村―」が開催されました。講師は、人と自然の関わりを調べる環境歴史学がご専門の、別府大学教授・飯沼賢司先生です。

先生は1981年から大分県の国東半島で行われた、日本で最初の荘園村落遺跡の調査に深く携わり、昨年、その半島の西側に当たる豊後高田市の田染小崎地区が「田染荘小崎の農村景観」という名称で国の重要文化的景観に選定されました。

“西の田染・東の骨寺”と称されるように、骨寺村と同じ中世の荘園で絵図の景観が良好に残る田染荘。国東半島一円に広がる、奈良時代に創建された宇佐神宮の荘園の中で最も重要視された所です。

地形に合わせた曲線の水田や狭い畦道・水路、そして神と仏が同居する神仏習合の世界。宇佐神宮の荘園として開かれた1千年前からその姿は変わっていません。

先生は講演の中で「水源のある場所には鎮守の森や磨崖仏が存在し、そこから里の世界に水が流れ水田となり、荘園が形成された」「安定的な生業を基礎とした持続可能な社会で、先祖が自然と闘い妥協しながら築いた最初の空間が荘園」などと田染荘を題材に、荘園の成り立ちや荘園が今日の村の形の原点であると説明されました。

骨寺村も、里の水田を潤す現在の本寺川の源流が山王山で、そこには日吉山王神を祀る岩屋などがあり、古代の人々は直感的に田染や骨寺の地に神や仏の存在を感じ取っていたのかもしれません。

そして、重要文化的景観に選定された田染荘の小崎地区は、荘園の歴史を語る600点の中世の史料や近世の絵図により、荘園村落の土地利用形態が今に継承されていることを伝えています。数や時代こそ違いますが、文書や絵図が残る骨寺村と共通していますね。

例えば圃場整備が行われていないこの地区では、昔ながらの水利システム・用排水が併用されています。このことが伝統的な集落の繋がりを維持し、水が循環することで多様な生物の生息が可能となると先生は指摘します。まさにこれは本寺の田屋敷の風景や田越しの灌漑・土水路に当たります。

畔道の花や虫、稲穂をわたる風、祭り囃子の音。「日本各地で消えゆく穏やかで懐かしい風景を未来へ伝えるため、両荘園遺跡の重要文化的景観の選定は大変意義あること」。先生は講演の最後にこう締めくくりました。（荘園室・N）

骨寺村？いえ、田染荘小崎地区です。昨年、“景観の国宝”重要文化的景観に選定されました。